

縛られたあひる

小川未明

青空文庫

流れの辺りに、三本のぶなの木が立っていていました。冬の間、枝についた枯れ葉を北風にさらさらと鳴らしつつつけていました。他の木立はすべて静かな眠りに就いていたのに、このぶなの木だけは、独り唄をうたっていたのです。

ここからは、遠い町の燈火がちらちらと見られました。ちやうど霧のかかった港に集まった船の灯のように、もしくは、地平線近く空にまかれたぬか星のように、青い色のもあれば、紅色の色のもあり、中には真新しい緑色のもありました。そして、その一つ一つに、いろいろの生活があるごとく思われました。木たちには、人間の生活というものがよく理解されていなか

つたようです。人間は、ただわがままで、無考えで、快樂を追っていると思われませんでした。まったく生き物の悲しみというものを知らないもののごとくにしか考えられません。だから、彼らは、かつてに林を切り倒し、土地を掘り返して、自分たちの生活についてはすこしの同情ももっていないもののように見えたのです。

三本の木は、たがいに頭を寄せ合つて、かなたの町の方を見ました。天気の良い日には、白い煙や、黒い煙が立ち上つていました。もし木立は、その煙が、自分たちの屍を焚く煙であつたと知つたら、どんなに驚いたことでしょう。やがて、夕日が沈んで暗くなると、燈火がちらちらと閃きはじめました。ところが、

その群むらがった火ひの中なかから、飛とび出したように、ぽつ、ぽつと、町まちをはなれて、幾いくつかずつ火ひが寂さびしい野原のほらの一方ほうに散ちつていくのでした。ある夜よるのこと、すぐ近ちかくにみずみずしい冴さえた魔物まものの目めのような燈火あかりがついたのです。これを見た、一本ほんの木きは、

「おや、あすこへも、やってきたぞ！」といいました。

「なるほど、いつここへくるかもしれない。」と、他たの一本ほんの木きは、不安ふあんそうに、答こたえました。

三本ほんの木きは、その夜よ、北風きたかぜに声こえを合あわせて、いつになく悲かなしい唄うたをうたったのであります。

明あくる日ひ、朝日あさひの影かげが、下したの流ながれの上うえに射さしたとき、小ちいさな魚さかなたちは、もうじき春はるがくるのを喜よろこぶように、銀色ぎんいろの腹はらを見みせな

がら水みずの中なかで踊おどつたのでした。そして、のねずみは、穴あなの入り口ぐちで、目めをこすりながら、

「昨夜ゆうべは、ぶなの木きさんが、悲かなしい歌うたをうたっていたが、人間にんげんどもがこのあたりをうろついて、木きを切きる話はなしでもしたのかな。いやこのごろの世間せけんの不安ふあんってありやしない。いつこの川辺かわべのおれたちの巢すも掘ほり返かえされてしまいかわかったものでない。危あぶないとなったら、どこへか引ひつ越こしをしなけりやならん。」と、ひとり言ごとをしていました。

午後ごごでした。なんだか、急きゆうに頭あたまの上うへが騒そうぞう々ぞうしいので、のねずみは目めをさしました。そこで、穴あなの中なかから出でて、のいばらや、藤ふじづるの下したをくぐりぬけて、ぶなの木きのところまできてみると、

いつ造つくつたか、そこには、みすぼらしい犬いぬでも入りはいりそうな小舎こやができていました。屋根やねには、さびたブリキ板いたを載のせ、周しゅう圍いは、破やぶれた板いたが立たてかけてありました。のねずみはのぞくと、天てんじよ井うから、ぼろきれが釣つるしてあり、バケツには、川かわ水みずが汲くんであつて、頭とう髪はつの伸のびた父ちち親おやらしい乞こ食じきが、曲まがつた指ゆび頭さきで、もらつてきた銭ぜにを数かぞえていました。そのそばに、十とおばかりの男おとこの子こが、口くちをもぐもぐさせて、なにか食たべているようすでした。これを見みたのねずみは、板いたのすきまへ頭あたまを突つつ込んだままどうしようかと、しばらくためらつていましたが、「ぶなの木きさんも、こんな人にんげん間まどもが下したに住すんではさぞ困こまるところとだらう。しかし、町まちの方ほうから、子こ供どもたちが釣つりにやつてこなく

なるだろうから、魚たちには、都合がいいかもしれない。」

そんなことを思いながら、小舎の中へは遠慮して、圃の方へ走ってゆきました。

はたして、乞食の親子は、ぶなの木の根もとで火を焚きました。

あおけむり、みきつた、こえだ、わ、青い煙が、幹を伝い、小枝を分けて、冴えた、よくふき清めたガ

ラス張りのような空へ上つてゆきました。このごろ、ぶなの木は、

春の近づいたせいか、空を見ると、去年の夏、飛んできたかわ

らひわのことを思い出した。かわらひわは、毎日のよう

に、どこからか飛んできて、枝に止まって、いい声でさえずりを

きかせたり、また、遠い旅の話などをきかせてくれたのでした。

そして、別れる時分に、さも名残惜しそうにして、

「また、来年らいねんの若葉わかばのころには、きつときますから、どうぞ、みなさんお達者たっしやでいてください。」といったのでありました。

三本ぼんのぶなの木きは、そのかわらひわのいったことを思い出すおもにつけ、こんな乞食こじきが、ここへやってきたのでは、たとえ自分じぶんたちが、無事ぶじでいても、かわらひわは、おそらく、二度どとここへはきて止まるとこともあるまいと考かんえたのでありました。それは、なんという情なさけない、また悲かなしいことだったでしょう。日ひが沈しずんでから、その日ひも募つり出だした、北風きたかぜに、木きは、昨日きのうにもまして悲かなしい声こえで唄うたをうたったのであります。

二、三日にちご後の、暮くれ方がたのことでした。だいぶ暖あたたかになつたので、水みずの中なかの魚さかなが、しきりと輪わを描えがいて泳およいでいました。このとき、

乞食の子は、町の方から、一羽のあひるを抱いて帰ってきました。それより、一足先に小舎へもどっていた父親は、それを見て、

「どこでさらってきた？」と、たずねました。

「犬がくわえてきたのを追いかけて、捕らえてきたのだよ、どこにも傷がついていないようだ。」と、子供は、あひるを大事そうに両腕の間に入れて、いつまでも放そうとはしませんでした。「焼いて、食べたら、うまかろう。」と、父親は、じつと、ふるえている羽の紫色をした鳥を見つめました。

「俺はいやだ、殺すなんて。」と、子供は、白目を出して、父親の顔をにらみました。

「どうする気だ？」と、父親は、そっけなく問いました。

「おら、飼かつておくのだ。」

「ばかめ、そんなもの飼かつておいてみる、おまえが盗ぬすんできたことになるぞ。」

子供こどもは、考かんがえていましたが、

「明日殺あしたころそうよ。今夜こんやだけ、川かわの中なかへ、一ひと晩ばん、足あしを縛しばつて放はなしておくから、それならいいだろう？」

「かつてにしろよ。」

父親ちちおやは、無理むりに今夜こんやあひるを殺ころすとはいいませんでした。せ

めて、一ひと晩ばんは、子供こどもの自由じゆうにさせておいてやろうと思おもいました。

「しつかり足あしを縛しばつておくぞ、さあ、この繩なわでな。」といつて、

父親ちちおやは、手てごろなじようぶそうな繩なわを取とり出だして、子供こどもの足あしも

とへ投げました。

子供は、だまって、繩を拾つて、あひるの足を結んでいました。

もう水の上は、ほの白く夜の空の色を映しているだけで、水ぎわ

に生えているやぶの姿がわからないほど、暗くなっていました。

子供は、しばらく、その暗を透かして、水の面がさざなみをたて、

あちらこちら泳いでいる、あひるのようすをながめていましたが、

手に握っている、繩の端をいばらの木の根につなぐと、さも満

足そうに、小舎の中へもどっていききました。それからのこと、

暗がり泳いでいたあひるは、足についた繩の重みで、身動きが

できなくなつたのか、岸へ上がって、やぶ蔭にうずくまってしまう

しました。

今夜も、ぶなの木は、悲しい唄をうたいつづけました。たぶん、あひるは、何事も夢のようで、意外であつた、この一日のでき事を思い出していたのでしよう、目をぱちくりさして、太いくちばしで、傷のついているらしい、翼の下のあたりをなめながら、気にしていました。そのうちに、つい自分が、どこにどうしているということも忘れて、あの居心地のよかつた古巣が、この付近にでもあると思つたのか、急に恋しくなつて探しはじめました。しかし、それは、ますます彼の体を窮地に陥れるものだということに気づかなかつたのです。

穴の中から、頭を出して、いつさいを知りつくしたのねずみは、あひるが、不格好なようすで、あわてるのを見て、はじめはに

くらいしい奴だ、いいきみだというくらいに思ったのが、だんだん
 気の毒になりました。それには、前には、前まえにこんなことがあつたから――
 ーいつかこの流れへ下りた白鳥はくちょうが、旅のおもしろい話をきか
 してやるからと、たくさんの魚たちを集めておいて、ふいに、か
 わいらしい小ぶなを三びきも食べて、どこかへ逃げていつてしま
 ったことを知っていたからです。けれど、この愚かなあひるには、
 そんな芸当げいとうは、どう見てもできそうはありませんでした。それ
 どころか、自分でぐるぐると繩をなにかの枝えだに巻きつけて、苦し
 まぎれに、ウエー、ウエーと悲鳴ひめいを上げていたのでした。ちよう
 どその声は、ぶなの木がざわざわと体を揺すつて歌うのに、調ちよう
 子を合わせて、頓とんきよう狂な拍子ひょうしでも取るようにきかれたので

した。

りこうなのねずみは、この風のうちに、いつもにない不安を感じたのです。昼間、もうだいぶ青々と伸びた麦圃を通っている時分にも、ただならぬ風のけはいを予知したのであるが、日が暮れてから、いつそうその不安は濃くなってきたのでした。

「この美しい、すみよかつた場所がこんなになってしまった。このとおりあひるは縛られて明日の命がわからないし、ぶなの木は、根本が焦がされている。そして、川の魚も、私たちも、安心してはいられない。すべてのものが息詰まっているのだ。なにか思いがけないことでも起こらなければ、もう二度と昔のように、平和な楽しい太陽の光は見られないだろう……。」

穴あなの入り口はいぐちから、夜よるの空そらを仰あおいで、こんなことを考かんえ込こんでいたのねすずみの姿すがたも、そのうち、いつしか消きえてしまいました。

真夜中まよなかごろ、子供こどもは、あらしの叫さけびで目めをさましたのです。小舎やが、ぐらぐらと動うごいて、ブリキのはがれる音おとがしていました。

「たいへんな風かぜだ。」

「いつでも逃にげる用意よういをしていれよ。バケツとふろしき包づつみを忘わすれんでな。」と、父親ちちおやがいました。

子供こどもは、外そとへ飛とび出だしました。空そらは、気味悪きみわるいほの白しろさで、ぶなの木きが、腰こしを折おれそうに曲まげて、風かぜの襲おそうたびにくびを垂たれるのが見みられました。

「父とうちゃん、あちらの空そらが、火事かじのように明あかるいよ。」と、子供こども

は、外そとから叫さけびました。

「大風おおかぜのときは、そういうもんだ。このあらしが過すぎれば暖あたたかになるぞ。」

ちようどこのとき、その声こえを打うち消けして、どつとたたきつけるごとく吹ふきつけた風かぜに、小舎こやは、めりめりとこわれて、ブリキ板いたがどこかへ飛とんでしまつて、なにかにぶつかつた音おとがしました。

「雨あめが降ふつてきた！」と、子供こどもが、大おお声こえで告つげました。

「さあ、いつものところへ逃にげろよ。」と、父親ちちおやはそこらにあつたものをひつつかむようにして、闇やみの中なかへ駈かけ出だしました。子供こどもは、川かわぶちまで飛とんでくると、あひるは、いまにものをくくられて死しにそうかなな悲なしい鳴なき声こえをあげていました。子供こどもは、刃先はきき

の鋭い小刀で、足を縛った繩を切りました。そして、そのままあひるを放して、バケツとふろしき包みを下げて、父親の後を追いかけてました。

雨と風と雷の、ものすごい一夜でした。その夜が明けはなれたときに、流れの水は満々として、岸を浸して、春の日の光を受けて金色に輝いていました。また、ぶなの木は、古い枯れ葉をことごとく振り落として、その後から、新しい緑色の芽を萌してしました。乞食は、ふたたびその木の下に寄りつかず、どこへいったやら、あひるの影も見えなかつたのであります。いずれ彼らの消息は、りこうな、敏捷なねずみによって、探ね出されて、ぶなの木や魚たちにもわかることでありましょう。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

初出：「児童文学」

1936（昭和11）年3月

※表題は底本では、「縛《しば》られたあひる」となっています。

※初出時の表題は「縛られた家鴨」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

縛られたあひる

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>